

リビング時評

マルイチセーリング（福井県越前市赤坂町、小林一朗社長）が2020年に創業満70周年を迎えるにあたり、従来になかった素材、技術、デザインの画期的椅子を開発、9月13日都内で製品発表会を行いました。

この日、開発者の川崎和男（ザインディレクター）（大阪大学、名古屋市立大学各名誉教授）が専門の医学的観点と幅広いデザイン業績を踏まえて開発コンセプトを述べ、説明会の参加者へ示唆と感銘を与えました。

根本に据えたのは素材です。福井県を原産とするカーボンファイバー（炭素繊維）を使用、

鉄と比較して比重4分の1、さらに比強度10倍、比弾性率7倍と強度と耐加力抜群の素材特性を持つことです。250kgの加

先端素材と英知と技術の結晶

マルイチ周年記念新作椅子

本紙 社長 長島貴好

重に耐えるうえ、女性でも簡単に持ち運びができる、そうした特性を生かしました。「100年持つ」と小林社長が説明しました。炭素繊維リサイクル技術は高額で、環境保全と経済面の合理性がまたれますが、3世代にわたる使用が可能のため、

エコロジ的には十分な対応素材といえます。

同社で考える想定上代は220万円（小林社長）と高額ですが、製品の持つ超付加価値と購入する顧客の拘りの価値観からみれば、祖父母、両親、孫世代へ渡つて暮らしのステージを高め、豊

かさを享受できれば年間2万円の償却費は安いと考えられます。デザインは「身体保護」椅子と「身体抱擁」ソファの新たなカタチを追求し、品格を持つシンプルなものに仕上げました。一見して高質な織地を張ったかのような表面ですが、実は1ミ

の炭素繊維板を5ミリの幅に波状加工し、その表面の微妙な紋様が繊維生地と見間違えう質感を醸しだしました。約2年間をかけて開発取り組みしたカーボンファイバーの椅子は、実際に座ると弾性が身体にフィットして、コントラクトのみならず、マンションや戸建ての住まいにも、一脚の椅子が居場所をつくる広がりを持つようです。

現在、国際特許も取得する目的を得たとしています。この加工技術は同社の高度技術をマスターした職人が先端的素材を一枚ずつ切断、折り曲げツール技法で制作したものです。まさに21世紀、令和新時代の幕開けに家具産業に登場した異色の製品発表でした。川崎教授の英知とマルイチ革新精神の結晶です。

マルイチセーリング創業満70周年で開発チェア発表 カーボンファイバー素材の革新製品 100年後も生きる先端性を強調



100%カーボンファイバーの椅子



川崎和男デザインディレクター



小林幸一会長



小林一朗社長

インのチェア。福井原産の先端素材を活用して耐荷重250kgの強度、女性が持てる軽量性、加えて身体を包み、支える柔軟性などの特長を持つ。また、世界市場を視野に物流に適したコンパクトなノックダウン式など、あらゆる面で革新性を有している。

小林社長は冒頭、概要の挨拶をした。「1950年に創業し、2020年満70周年を迎える。小林幸一会長が『素晴らしい出会いと感謝の50年』と軌跡を表現したが、その思いは今後も変わらず、さらに新たな時代の生活者満足の実現を社員一丸となって推進し、より一層の成長を指して邁進する」

「私達は『美しいインテリア用品で理想的な美のある暮らし方、住まい方を提案する生活製作』をスローガンに、国内の職人による素材とパーツで一品ごとに丁寧に製作し、お客様にお届けしてきました。今回それらの想いと、企業の存続性を訴求することを目的にCIを改めた。それを基に企業ブランドを作り上げ、美しいインテリアライフを提案する企業として、革新性の高い製品を開発、国際的企業としての存在を目指す」

また、丸に1の文字を入れた新ロゴを発表、同社の新時代へ向けて国内外へ発信する統一したイメージを打ち出した。ロゴと新製品を手掛けた川崎和男氏とは30数年の縁を持ち、マルイチでなければできない製品のデザインをお願ひしてきた。今回の新製品に使用しているカーボンは耐摩耗性、耐熱性、耐酸性など素材として高い市場価値を持つ。

次いで川崎和男氏がスクリーンに70周年記念の開発チェアについてのコメントを、同氏独自の理論で構成した経緯、思想などを解説した。モノの立場に①実在性②機能性③構造性④象徴性がある。そうした従来のイス、ソファ、ツールを超え、ものづくりのためにこれからのインテリア・ドメイン、インテリア・フェーズを提言した。

このインテリアに実在するモノの機能や構造を、新素材で構築し、象徴から「神話」となるモノ語りを提案すると語った。

た。チェアは1ミリのカーボンファイバーを五つの波状にし、軽さと強度を構成、特許、意匠を国際的に申請した。結果、軽い、強い、美しい素材特性と、身体保護、身体抱擁の商品イメージを表現した。

最後に小林会長が「50年、100年後になるほど思われる製品を作りたいと川崎さんをお願いした。数年で飽きて捨てるものではなく、環境にも貢献することを考えなければならぬ。そういう素材がカーボンファイバーだった。総重量10kg未満、耐荷重250kg、座る人の体重、身体能力によってバウンドが変化し、支えてくれる。強度を支える波状を説明、世界最小のピッチとなった」と語った。

なお、小林社長は参考上代を220万円とする」と述べた。

【解説】製品開発、デザイン、CIロゴなどを手掛けた川崎和男氏は、多くの実績と各分野に功績を残してきた。この度のマルイチセーリングのメモリアルチェア開発コンセプトの解説は、一般的に難解

だったが、家具業界には深く示唆するものがあった。なかで当日配布したパンフレットの「インテリア・ドメイン」と「インテリア・フェーズ」は今後、その対応を今回のカーボンファイバーの椅子に示した。

(長島)